

# パースの食を支え続ける日本食堂 タカズキッチン 和食の裾野を広げた「Taka's Kitchen」

1992年にフリーマントルから歴史をスタートさせた「Taka's Kitchen」。脱サラから一代で築いてきた父や、その Taka's Kitchen について娘の温水亜希さんにお話を伺いました。



開店と同時に店内に行列ができる、Taka's Kitchen Barrack St. 店。オーストラリア人にも「TAKA」の名前で親しまれている。

## お父さんの脱サラから始まったパース移住

現在、Taka's Kitchen で事務全般を担当する温水亜希さん。1989年に創業者で父の温水滋孝さんと母、そして3歳年上の姉の4人でパースに移住してきた。「気が付いたらパースに馴染んでいましたね。私の場合、10歳の時の渡豪だったので、家族でパースに移住することが決まり、これから自分の身に何が起きるのかわかる年齢でした。でも私は、海外という新しい場所への不安や友人と別れることの寂しさは、不思議と感じませんでした。家族が一緒だったからでしょうね」

亜希さんの父である滋孝さんは、日本在住の頃は障害者ケアの仕事に携わっていた。真面目にコツコツと生活基盤を築いてきた人だったという滋孝さん。初めての海外旅行先に選んだパースが、第二の人生を歩む先になるとは、ご本人も考えていなかったようだ。

「お父さんは、友人から『パースで日本食レストランを

始めるから手伝ってほしい』という誘いを受けて、二つ返事で渡豪を決めたと聞いています。それまで包丁すらまともに握ったことのないお父さんでしたので、パースに来る前に東京の日本料理屋で修業をしたそうです」続けて亜希さんは、「実を言うと、お母さんがオーストラリア行きを促したんです。お父さんを理解して、後押ししたとかではなく、純粋にお母さんが海外で生活してみたかった。うちのお母さんはチャレンジ精神が旺盛で、活発なタイプですから」と話す。

## パースに受け入れられた日本食の“大衆食堂”

「友人のレストランの立ち上げがひと段落したところで、お父さんは自分のレストランを始めることを決めていました。たまたま引き取ったお店が「トシズキッチン」という名前前で、そのままうちのお父さんの名前に看板を変更して営業を開始。こうして“日本食レストラン・タカズキッ